

公益社団法人私立大学情報教育協会
平成 26 年度第 4 回大学情報システム研究委員会議事概要

- I. 日 時：平成 27 年 3 月 20 日(金) 14:00 から 16:00 まで
- II. 場 所：私立大学情報教育協会事務局会議室
- III. 参加者：疋田担当理事、岩井委員長、片岡委員、杉山委員、小川委員、藤本委員
アドバイザー賛助会員：(株)朝日ネット、(株)ニッセイコム、(株)富士通マーケティング
事務局：井端事務局長、野本、藤江

IV. 検討事項

前回の検討事項である「シラバスを通じて学生に呼びかけるための工夫」、「学士力の修得状況を自己点検できるようにするためのワークシートの構成とその例示」を継続検討し、語りかけ及びワークシートの確認を行った。「学士力の獲得に不安を抱える学生を対象とした学修支援方法の留意点」、「個々の授業課題を解決するための改善策を学生にフィードバックする際の留意点」も継続検討し、「授業の有効性を確認する方法のモデルの例示」は意見交換に留めて次年度の検討課題とした。

1. シラバスを通じて学生に呼びかけるための工夫

- ・ 何を学生に気が付いてもらうかがもっとも大切。ポイントを明示して、出来るだけ短く学生にエンゲージメントを感じさせるような語りかけが重要。
- ・ 事例として学生の心に訴えかけるような語りかけがいくつかあれば良い。
- ・ 語りかけをパターン化してしまうと、こうしなければいけないようになってしまうので、参考になるポイントなど、教員から一点、学生から 2 点くらいあげれば良いのではないのか。
- ・ 語りかけではなく、少ない言葉で簡潔に、教員の呼びかけの例のポイントを最低限明示する。スクリプトである必要は無く、このようなことを盛り込んで説明した方が良いという事例を示すのが良いのではないのか。
- ・ 学びの履歴書になる、就職の際の自己アピールにも役に立つ、なによりも、教員と学生のコミュニケーションのツールとしてきっちり向き合うことの意味表示の重要性などのポイントを記載する。
- ・ 学生からの語りかけは、細かい所属は省いて個人が特定できない形で、事例としてこういう事が良かったとの声があるなどのポイントを付け加えながら、簡潔に例をあげればよい。
- ・ シラバスで先生から語りかけるのは前提として、それだけでは説得力がない、学生に頼んで、語りかけを行うのは効果的だ。学生目線で感じ取れるような工夫が大切である。それぞれの大学で、それぞれの先生が、それぞれの O B の方々に話してもらい活用すればよい。仕掛けとイメージを出すのは良いと思う。
- ・ 教員からの呼びかけはポイントを纏める。学生の声は生の声をあげた方がリアリティがあるので、具体的事例をあげる。又、こういう事が伝わるのが大事だというポイントも、付け加え纏めることとなった。

2. 学士力の修得状況を自己点検できるようにするためのワークシートの構成とその例示

- ・ 理系などは積み上げ式の勉強であるから、一回の授業でわかるということはない。そこで前回の授業について復習してきたかを聞くのがまず前提と思われる。
- ・ 授業の中で理解できたところはどこで、理解できていないところを学生自身に振り返りをさせる。その中でわからない項目について、自力で復習すれば理解できるレベルでなのか？を確認する。授業のすべてが理解できるという前提はない。必ず理解できていないものがある。それが自分で復習すれば分かりそうな手ごたえなのか？お手上げ状態なのか？を把握することが大切。
- ・ 理解する努力は何をすれば良いのかを問うもの大切だ。復習する手段を少し促がしてあげ

る役目になる。

- ・ せっかく勉強したことが、どんな応用なのか、どのようなことと関連しているのかという事を記載させるもの、次へのモチベーションを高めるという意味で良いと思う。
- ・ ワークグループの事例の一つとして実験のワークシートが考えられる。
- ・ 実験の事象を理解するということも目標だが、友達と協力し合って、作業を進めていくということが大事な要素になってくる、組織の中で、あなたはどのように寄与したか、記録係だったとか、もしくは実験を主体的に担当したなどを記載させる必要がある。
- ・ アクティブ・ラーニングやPBLなど、その振り返りをさせるシートも必要になってくる。アクティブ・ラーニングの要素が授業の中に入ってくると、それに対してもポートフォリオでも振り返らせなければいけない局面が出てくる。
- ・ 「理解しているか」と問う、理解という言葉のいわゆる先生の受け止め方と学生の受け止め方が全然違う。したがって、この理解という言葉の中に何が含まれているのかというと、因数分解をしないといけない。
- ・ ポートフォリオで大事なのは期中だと考える。期中で学生の動きをキャッチアップしていく。学生にファシリテーターが自分のワークシートを見ているという意識づけをさせる。そのファシリテーターは2つあって、院生というファシリテーターと仲間のファシリテーターである。
- ・ 友達同士とか学生同士でファシリテーターが、自分のワークシートについてコメントを必ず1行でも書いてもらうようにしている、アクティブ・ラーニングの場合は、必ずファシリテーターの意見を入れる必要があるので、授業に入る前に、コメントで学生の心の中に入っていくようなワークシートを作らなければいけない。
- ・ アクティブ・ラーニングはこれから全面的に出てくるので、アクティブ・ラーニングを前提とした時のワークシートというのを逆に出さないといけない。アクティブ・ラーニングを前提とした時には、知識を定着や知識を活用できるかどうかの他に、主体性をもって勉強しているかどうかというのを、どういうふうにカウントするか。教室での学修だけでなく、教室の外でどのくらい勉強したか、学修時間を書かせるということが大事だ。学修行動をモニタリングするようなデータとしてワークシートを使わなければいけない。授業始まる前に、学生同士で、自分たちの書いたのワークシートを見させて、学生目線でコメントを入れていく。それがいいとか悪いとか別としても、ワークシートは学生の刺激になることが大切だ。
- ・ 他の大学の例として学生が言ったことだが、一番効果的なのは先生ではない、学生に自分たちの書いたのを見られるのが一番緊張する。だから真剣にワークシートに向うという。要するに学生の心理を、先生方が掴んでワークシートにそれを反映していかないといけない。ただ形だけのワークシートを出しても、学生の心理や心は動かない。
- ・ 学修の時間をどうやって学生達に確保させるかというための仕掛けが大事だ。
- ・ カリキュラムに関わる問題になるが、一人の学生を学士力という立場で、どうやって支援していくのか、ということだ。ポートフォリオを実施して行くと、一人の学生がいろいろな科目で、いろいろなことを記載していく。1年生～4年生の学士力があって、その学士力に向けての学びが順調かを把握する必要がある。一人の学生を責任をもって質保証していくのかということについてポートフォリオとの関連付けをやはり考えておくことが非常に重要。
- ・ 反転授業では予習を前提に知識の定着度を見て、先生が問いかけをして、その問いかけに対してソクラテック・メソッドでやってもいい。学生と、ちょうど平均値を学生に出してやりとりをする。そうすると、分かっていることが明確となり、そこは先生が座学で補う。グループを構成して、考えさせても良い。狙いは関連付けだ。知識の活用は出来ないが、関連付けを意識させることが大切である。教室の授業が終わると、先生はそれを全部巡視して、学生の理解度を直接確認し、教材を練り直して、翌週の教材をどう作るのかを工夫する。つまり、反転授業の場合にはワークシート要らない。ワークシートが全部必要なのかという前提の話として、いろいろな場面があるので、整理をしたほうがいいと思う。

- ・ 振り返らせるということが、ポートフォリオの一番重要なところなので、自責していくということを明確にしたい。また、大学それぞれの状況であるとか、カリキュラム構造に応じて考えないといけない。さらに、反転授業など必ずしもワークシートが必要なのか、ということも意識する必要がある。ワークシートは学士力修得状況を点検するツールであり、学生の伸びが見える化が出来るようなワークシートである必要がある。以上の要件と他大学の事例を参考に委員長が纏めることとなった。

3. 学士力の獲得に不安を抱える学生を対象とした学習支援方法の留意点

- ・ 各大学の対応として、全学生に全学的に学生一人一人の学びに応じた支援体制の整備に向けて教職員が一体となって組織的に取り組むためのマスタープランの策定が必要。
- ・ 学生を支援する観点から、授業の進み具合、学習到達法、ワークシートなどを通して学生一人一人の不安や悩みを把握として、組織的な対応を目指して、情報共有を促進する必要がある。
- ・ いろいろなタイプの大学とか大学院に対応しなければいけないので、タイプ別にマスタープランの中に対応すべきやり方を考えておかないといけない。大きくは基礎学力が不足しているとか、理解が不足しているとか、それから人間関係の問題とか、各種障がい等という形。
- ・ 学修支援室や学修支援センターといったような、学修を支援するような部署との連携というのも必要になってくる。
- ・ 大学としてのセーフティネットを考えないといけない。大学全体として組織的なセーフティネットを築く必要があるということは、どこかに言及する必要がある。
- ・ マスタープランは学内的な認識の共有が必要で、FD・SDによる対応に関する知識と、その方法についての理解も当然必要になってくる。
 - ・ 情報共有について、例えばうつ傾向がある学生が、うつ病等への投与をされていると、眠くなる。体もだるくなるようだ。例えば非常勤講師の先生だったら、この学生は授業でいつも寝ている、と本人の能力とは別にしてそこが評価されてしまう。学生が吐露したことをきっちり受け取って情報を共有することが重要。
- ・ 学生の本音を大学がどのように受け止めて対応するか、大学の責任はいったい何なのか、ミッションは何なのかということを、常に念頭に置いてポートフォリオに記載させる。大切なのはポートフォリオをどう活用するかそういうレベルの話ではなく、大学のミッションだ。大学としてしっかり学修支援するという体制が出来ているという前提で、ポートフォリオに取り組ませる。

4. 個々の授業課題を解決するために改善策を学生にフィードバックする際の留意点

- ・ 学修ポートフォリオが持続的に使用されない大きな原因の一つというのが、フィードバックをしていないということだ。教員は学生の意見やコメントをできるだけ迅速にフィードバックして、とりわけ授業改善を求める要望については、改善策や改善内容について、速やかにフィードバックする必要がある。
- ・ 教員は学生のフィードバックする際に、学生の不利益にならないように工夫する必要がある。教員のフィードバックによって、学生の不利益が生じないためには、情報の閲覧範囲についても十分に検討する必要がある。
- ・ 学生個人が不利益を被るとか、それからその改善要求をすること自体が点数に反映されるから言わないというようなことが起こってはいけない。そのところは十分に配慮する必要があるだろう。
- ・ ポートフォリオの運用の時に必ず問題になってくる、閲覧権限や閲覧範囲の問題は、充分に考慮する必要がある。
- ・ 教員に聞かれてもすぐには答えられないような、大学の体制や大学の財政、予算関連などを学生が聞いてくる場合もある、そのフィードバックの仕方も留意点に上げないといけない。

5. 授業の有効性を確認する方法のモデルの提示

- 授業の進み具合を点検するワークシートや学生の理解度や到達度を確認するワークシートなどを通して、授業デザインの妥当性や、シラバスとの整合性を確認することが出来るということは、学生にこういう力を身につけさせますと言って、ワークシートによって力ついていないことが見えてきたら、それは修正する必要があるということ。
- 授業の進め方、授業デザインが本当に妥当だったのか、ということも学生のフィードバックを通して見ることできる。
- 学修行動の記録を点検して、その授業の課題発見する方法モデルを提示することも大切。
- 教員が継続して授業改善の取り組みを行うためには、教員の場合にもティーチングポートフォリオが必要になってくる。学生も継続的に成長を見るのと同じように教員もそれぞれの改善の道筋や足跡を、ティーチングポートフォリオという形で見ていくことは重要である。
- カリキュラムの妥当性とか、プログラムの妥当性を評価するのは必要だ。個々の科目の改善は当然だが、それが他の授業とどう繋がっているのかということを意識しないといけない。全体を見る時に、カリキュラムツリーとかカリキュラムマップを考える必要がある。
- カリキュラムの妥当性とか、プログラムの妥当性を評価する機関が、内部機関でもいいが、外から評価が好ましい。
- カリキュラム全体、科目群、個々の科目とそれぞれの評価が全部実は絡まってくるので整理をしながら、ティーチングポートフォリオの可能性についても追求していきたい。

V. 今後の検討の進め方について

今年度の研究内容をメールで調整することで取りまとめて総会で報告することになっている。